

フランケンシュタインの真実

経営学部

山田 晶子

フランケンシュタインとは誰か？

「フランケンシュタイン」という名前を聞いて、身の毛がよだつ恐ろしい顔と体の怪物を思い浮かべる人は多いだろう。しかしこれは全くの誤解である。フランケンシュタインは小説中の人物で、18世紀に生きた、天才的に頭が良く見かけも美しい17歳の科学者である。スイスのジュネーヴの教養ある家庭の出身である。それではなぜフランケンシュタインという男は恐ろしい怪物であるという嘘が、巷に定着してしまっているのだろうか？フランケンシュタインの悲しみを一緒に考えて欲しい。というのは、彼の悩みは21世紀的なものと言えるからである。

まず、フランケンシュタインが現代の多くの人に知られるようになった経緯から述べよう。上述したように、彼は歴史上実在した人物ではなくて、小説中の主人公の名前である。小説の題名は『フランケンシュタインまたは現代のプロメテウス』（以下『フランケンシュタイン』と略す）（原題 *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*, 1818）で、作者はメアリ・ウルストンクラフト・シェリー（Mary Wollstonecraft Shelley, 1797-1851）という名前のイギリス人女性である。彼女の両親は有名な知識人である。父親は『政治的正義』や『ケイレブ・ウィリアムズ』を表わした急進的革新思想家のウィリアム・ゴドウィンであり、母親は女性の権利拡張を求めて活躍し『女性の権利の擁護』を表わしたメアリ・ウルストンクラフトである。

また彼女の夫はイギリスロマン派詩人であり「西風に寄せる歌」という詩で世界的に有名なP・B・シェリーである。メアリ・W・シェリーが生きた時代は、イギリスでは産業革命が始まって工業化が進み、進化論が唱えられはじめ、電磁気学が発達し初めていた時代である。また、イギリスの対岸のフランスではフランス革命後の政治的大嵐が吹き荒れ、ナポレオンが台頭した時代である。

ゴシック+ロマン主義+SF

このような激動の時期（18世紀中頃から19世紀初頭）に、イギリス文学史上「ゴシック小説」と呼ばれるジャンルが発達した。ゴシックとは「ゴートの」という意味であるが、現代では「ゴシック体活字」という意味や建築学上の用語として用いられている。西欧で中世に建造された寺院や城で、長く細く高い尖塔や大きな窓をたくさん持っている建築物をゴシック様式と呼ぶ。イギリスのウェストミンスター寺院やフランスのノートルダム寺院が代表例である。ゴシック小説とは、このようなゴシック建築物を背景とし時代は中世に取り、美しく若い姫や娘が謎めいた事件に巻き込まれ、姿の見えない悪者から逃げまどうが最後には謎が解かれ救われるという筋をとっている作品が多い。H・ウォルポール（Horace Walpole, 1717-97）の『オトランド城』（*The Castle of Otranto*, 1764）が代表的である（ちなみに筆者が英文学科の大学生として、レポート用に初めて原書で読んだ作品はこの『オトランド城』であった）。ゴシック小説の主題は「恐怖と怪奇」である。メアリ・W・シェリーの代表作『フランケンシュタイン』も、ある意味ではゴシック小説のジャンルに入れられている。そして、神秘的なもの・超自然的なものを求めるロマン主義の要素も備えている。

またこの小説は19世紀末から20世紀にかけて広まり現代でもなお盛んに書かれ続けているSF小説の元祖と言えるであろう。SFとは Science Fiction の簡略形であり、「空想科学小説」と訳されている。これは科学技術や科学的認識を応用した作り話のことである。『フランケンシュタイン』

も科学を活用した話なので、SFと言えるのでありかつイギリスでの最初のSFなのである。

次に『フランケンシュタイン』とはどのような内容の小説なのかを簡単に述べよう。ヴィクター・フランケンシュタインという才能豊かな若者は、若くして母親を病気で亡くす。彼の悲しみはひどかった。大学で医学を学んでいた彼は、当時死者の再生という研究が盛んであったため、また人造人間の創造が議論されていたため、彼も死者の再生という研究に没頭するようになる。母親の死の悲しみが一因であった。そしてついに完成させたのが、犯罪者の死体を用いての人造人間であった。完成した人造人間には名前が付けられないまま、「それ」は逃げてしまった。「それ」は醜い外観を持ち体力と知能が人並みはずれて強かった。もし「悪」の精神がやどっていたなら「それ」は犯罪者になるはずであった。フランケンシュタインは「怪物」を造ったことを後悔し、「それ」を自らの手で始末しようとする。しかし「怪物」は悪い心を持ったものではなかった。善悪を知らない「無」の心を持っていた。しかし「親」であるフランケンシュタインから逃げて行った後、外観が醜いために他の人間達によって虐められ孤独地獄に陥った結果、ついには全ての人間に憎悪を抱くようになった。また自分が苦しむのは「親」であるフランケンシュタインが自分を創造したためであると考えると、フランケンシュタインに復讐をしてゆくことを決意する。彼の婚約者や他の罪のない人間の殺害を繰り返す。フランケンシュタインは、自分で始末をするためにどこまでも「怪物」を追ってゆき、最後には北極海に行き着く。フランケンシュタインは、自分が人造人間を造ったがゆえに社会に多大な災害をもたらしたことの良心の呵責に堪えかねて絶命し、怪物も氷の海の中に姿を消す。

その21世紀的テーマ

この小説はこれまでに何度も映画化されてきたのだが、そのおどろおどろしい内容に魅せられる人が多く、人気を博してきている。シェイクスピ

ア俳優であるケネス・ブラナーが監督しかつ主人公のフランケンシュタインを演じ、怪物役をロバート・デ・ニーロが演じた映画『フランケンシュタイン』は日本でも公開され話題になった。

しかしながら、他のSF小説を措いてこの小説がそのユニークさを発揮し、SF小説の中でも特に有名なのはなぜだろうか？それは、副題に「現代のプロメテウス」とあるように、「プロメテウス」的テーマのためである。プロメテウスはギリシア・ローマ神話に登場する巨神で、主神ゼウスと闘った神である。ゼウスが造った初めての人間に火を与えた巨神で、そのために、火を人間から隠したがっていたゼウスによって罰せられた。この罰がこの上なく残酷なもので、プロメテウスは山中の大岩に鎖で縛り付けられ大鷲が飛んで来て彼の肝臓を啄むというものである。彼は神なので死ぬことはなく傷は翌日には治るので、毎日鷲が肝臓を食べに来て、彼の苦痛は永遠に続くのである。大鷲を退治して彼の苦しみを終わらせた英雄がヘラクレスである。ゼウスに反抗した存在として、つまり権力者に反抗した存在として、プロメテウスは意味ある苦しみを味わう偉大な人間のシンボルとなっている。文学や絵画の主題にも繰り返し描かれてきている。アイスキュロス、P・B・シェリー、ギュスターヴ・モロー等の作品がよく知られている。更に、同様の主題を持った文学作品として、ジョン・ミルトン (John・Milton, 1608-74) の叙事詩『失楽園』(Paradise Lost, 1667) があり、神に反抗し罰せられた存在として有名な天使ルシファー (後の悪魔サタン) とアダムとイブが描かれている。またドイツ人ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の『ファウスト』(Faust, 1790, 1808, 1832) の主題もそうであると考えられる。

人間を創ろうとしたフランケンシュタインもまた神に反抗した人物と言えるであろう。ゆえに彼は孤独と自責の苦しみを味わった。現代では、クローン人間の作成などで科学者の倫理が問われている。科学者の研究はどこまで許されるのか、という問題は、早くも『フランケンシュタイン』に

表れていた。神の技への挑戦は、人間の偉大さを示す仕事であると同時にまた謙虚さも求められる仕事なのである。

参考：『フランケンシュタイン』の翻訳書は、
角川文庫、創元推理文庫から出ています。

「豊橋東ロータリー」と 「愛知大学」

法学部
常石 希望



韓国・中央大学校と言えば、周知のごとく愛知大学の姉妹校。医学部も備え学生数2万名をはるかにこえる韓国私立大学の雄である。愛知大学と中央大学校との姉妹関係は1996年に始まり、今年で10年目という一つの節目を迎える。その間の両校の交換留学生総数は40名を超え、また韓国セミナーに参加し中央大学校に約1カ月滞在了愛大生は120名を超える。10年という決して長くはない時間に、これほどの交流の数値に至っている点に改めて驚かされる。

ところで、ここで紹介しておきたいのは「豊橋東ロータリー」との関係である。上述したように、愛知大学と中央大学校が姉妹関係を開始したのは1996年のことであった。これには愛知大学側では陶山信男名誉教授、中央大学校側では故・黄聖圭（ファン・ソンギョ）教授の尽力が大きかった。ところが、同じ年「豊橋東ロータリー」と「中央大学校」との国際交流プロジェクトという姉妹関係も開始するのである。ここでも上記両先生の協力、特に中央大学校側の黄先生、また豊橋東ロータリー側では故・中村英彦氏、および中野博三氏を中心に国際プロジェクトが開始された。

つまり「豊橋東ロータリー」も「愛知大学」も中央大学校と姉妹関係を結び、しかも共に同じ年に、ということであれば、「豊橋東ロータリー」と「愛知大学」との関係は、まさしく中央大学校を介しての「兄弟関係」と呼ぶにふさわしいと言えよう。

「豊橋東ロータリー」では過去10年間にわたって様々な国際交流プロジェクトを実施してきたが、特に愛知大学と関係の深い交流だけを挙げれば、毎年7月に開催される、“中央大学校日本語日本文学科の学生数名と教員の豊橋招待”がある。つまり、韓国の学生諸君に三河文化を紹介し、名古屋を紹介し、従って日本を紹介しようというプログラムである。これには、より直接的に日本を肌で感じてもらうための「ロータリー会員の自宅ホームステイ」という熱意のこもったプログラムも含まれており、まことに頭の下がる思いである。また、同期間中にはかならず大々的なパーティーを開催し、ここには国際交流に係のある愛知大学教職員と留学生（特に中央大学校と関係のある愛大留学生）が毎年招かれている。冒頭の「写真」は本年2005年7月の同パーティーの一コマ、右側は豊橋東ロータリー・落合幸一郎会長、左側は中央大学校日本語日文学科・任英哲（イム・ヨン Chol）学科長。

以上、わが愛知大学とは国際交流を通して「兄弟関係」になる「豊橋東ロータリー」のことを紹介させていただいた。